

Title	関係性に応じた怒り感情の制御に関する規範の検討
Author(s)	吉田, 琢哉; 高井, 次郎
Citation	対人社会心理学研究. 2008, 8, p. 35-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3613
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

関係性に応じた怒り感情の制御に関する規範の検討

吉田琢哉(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

高井次郎(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

感情の表出—非表出を軸とした感情制御方略に関するこれまでの研究では、概して精神的健康との関連においてその効果が検討されてきた。しかしどういった制御方略が効果的であるかは、少なくとも怒りについては、相手との関係性により異なる。こうした関係性に応じた制御方略の使用を規定する要因の1つとして、感情制御に関する規範が考えられる。しかし規範に関するこれまでの知見では、地位と親密性のどちらの要因が関わっているか定かでない。そこで本研究では怒りに注目し、場面想定法を用いて、地位と親密性の要因が怒り感情制御に関する規範や制御方略の使用傾向に与える影響について検討した。その結果、概して地位の要因が、怒り感情制御に関する規範に影響を与えていることが明らかとなった。しかし一方で、規範が制御方略の使用傾向に与える影響を統制しても、なお地位の要因は制御方略の使用傾向に対して影響を示した。こうした結果を踏まえ、規範以外に制御方略使用の規定因を探る必要性や、オンラインでの情報処理を検討する必要性について議論された。

キーワード: 怒り、感情制御、規範、関係性

問題

他者との相互作用の中で生じた感情をどのように制御するのかという、いわゆる感情制御の問題については、これまでに様々な角度からの研究がなされている。感情制御の様々な下位概念を尺度化した調査研究に限っても、表出—非表出を軸とした感情表出傾向(たとえば King & Emmons, 1990; Roger & Najarian, 1989; Watson & Greer, 1983)をはじめとして、生じた感情についてのモニタリング傾向(たとえば Bagby, Taylor, & Parker, 1994; Mayer & Stevens, 1994; Swinkels & Giuliano, 1995)や感情表出に対する態度(Joseph, Williams, Irwing, & Cammock, 1994; 坂上・菅沼, 2001)、そして反すう(Gratz & Roemer, 2004; 伊藤・上里, 2001; Roger & Najarian, 1989; Sukhodolsky, Golub, & Cromwell, 2001)など、多岐にわたっている。これらのうち、表出—非表出を軸とした感情表出傾向に関する尺度がもっとも多く開発されていることから、ここではこうした感情表出傾向を感情制御方略と便宜的に定義する。どのような感情制御方略が有効であるのかについて、これまでの研究の多くは一般的な感情制御方略の個人差と精神的健康との関連を見ることによって検討されてきている。

このように感情制御方略はもっぱら通状況的、特性的なものとして扱われているが、しかしどのような感情制御方略が効果的であるかについては、対人的な文脈による影響も想定される。つまり、どのような相手との間に生じた感情なのかによって、望ましい方略は異なってくるであろう。というのも、相手との関係性によ

って、感情を表出することが適切かどうかについての規範が異なると考えられるためである。こうした規範の差異を示唆するものとして、いくつかの研究で、関係性の違いによって感情表出の傾向が異なることが報告されている。Barrett, Robin, Pietromonaco, & Eysell(1998)では、感情の内容が弁別されてはいないものの、親密な相手ほど感情表出を行う傾向が示されている。Lively & Powell(2006)では怒り感情の制御に限定し、職場と家庭での使用する制御方略の傾向の違いを検討している。その結果、怒りを感じた際にそれを相手に直接伝えるという方略は、職場よりも家庭で、また職場の中では目上の相手よりも同等または目下の相手に対してより使用されることが明らかとなっている。本邦でも大淵が一連の研究によって、関係性と怒りの表出との関連を検討しており(大淵, 1986; 大淵・小倉, 1984, 1985)、相手が目上の場合よりも身近な人である場合に直接的な攻撃行動がとられやすいという傾向が見られている(大淵, 1986)。また木野(2000)でも、地位の違いによって怒りの表出傾向に差が見られている。具体的には、感情的攻撃、いつもどおり、無視、表情・口調、嫌味、遠まわし、理性的説得という7つの制御方略をとりあげ、理性的説得は先輩よりも同輩や後輩への表出が、感情的攻撃は先輩よりも後輩に対する表出が、そしていつもどおりという方略は同輩や後輩よりも先輩に対して使用される頻度がそれぞれ多いという結果が示されている。

これらの研究は、相手との地位や親密性の違いによって、相手に感情を表出する程度が異なることを示しているが、しかし関係性に応じた規範の違いを直接

的に明らかにしたものではない。規範を直接とりあげた研究としては、木野(2004)が挙げられる。木野(2004)では木野(2000)が扱った各表出方法についての適切性認知を検討している。その結果、理性的説得を先輩から後輩へ表出するのは、後輩から先輩へ表出する場合よりも適切であると認知されており、いつもどおりという方略では逆の結果が得られている。この結果は地位に応じた規範の違いを示すものであるが、親密性に関しては“それほど親しくない相手”に統制されており、その効果が明らかでないという限界を伴っている。つまり、関係性に応じた感情制御方略についての規範の違いは地位のみの影響であるのか、親密性の影響をも受けるのかについては未だ明確ではない。そして関係性による感情制御方略の用いられ方の違いが規範に応じたものであるのか、それ以外の要因を想定する必要があるのかについても、感情制御の効果を理解する上では、明らかにしておく必要があるだろう。

以上のことを踏まえて本研究では、場面想定法を用いて、相手との地位と親密性の違いが規範意識に与える影響と、感情制御方略の使用に及ぼす規範意識の影響の2点について検討することを目的とする。制御の対象とする感情としては、怒り感情を取り上げる。なぜならば、表出するか否かといった意味での感情制御が、対人関係上且つ個人の精神的健康上に及ぼす影響が他の感情と比べて相対的に大きいと考えられるためである。怒りの感情は攻撃行動と結びつきやすく、その表出は対人関係の破壊だけでなく、攻撃行動を起こしたことによるネガティブな自己評価をも生じさせるゆえに精神的健康を低めてしまうというリスクを伴う。更に表出をしないという選択を行っても、抑制は精神的健康を低めるというリスクを伴うことから、怒り感情に関しては表出も抑制も、ネガティブな影響を及ぼしてしまう可能性を含んでいる。実際に、怒りの表出も抑制も、精神的健康とは負の関連を示すことが報告されている(Bleiker, Van der Ploeg, & Hendriks, 1993; Martin & Dahlen, 2005; Martin, Wan, David, Wegner, Olson, & Watson, 1999; Sperberg & Stabb, 1998)。

場面想定法を用いて関係性の違いを検討している先行研究に上述の木野(2000)が挙げられるが、木野の研究では大学生を対象として、怒りが生起するような同一の場面を設定し、同じ部の中での先輩、同輩、後輩という地位による怒り制御の違いを検討している。この方法ではシナリオを統制できるという利点があるものの、大学生の部活内での学年の違いが、果たしてどれほどの地位の違いを反映しているものであるのか

という疑問は残る。地位の違いは場の公共性に反映される面もあるため、大学生を対象とした場合、バイト先での上司との関係といった、公共の場での対人関係についても考慮する必要があるだろう。しかし、こうした上下関係がはっきりしている関係性と、地位が対等である関係性とで、共通したシナリオを想定することは難しい。そこで本研究では、立場が同等の相手と目上の相手のそれぞれで異なったシナリオを複数用意して比較検討することとする。シナリオを複数用いることで、シナリオの違いによる影響を一定程度抑えることができるだろう。

また怒り感情の制御方略に関する枠組みとしては、吉田・高井(印刷中)で取り上げた5つの方略のうち、一方的表出、建設的表出、抑制、視点転換の試みの4つの方略を用いる。吉田・高井(印刷中)では、表出-非表出という分類のみではなく、表出の中でも対人関係を破壊するリスクの高い表出方法としての一方的表出と、関係改善を促進する可能性の高い配慮的表出とを弁別している。さらに非表出についても、精神的健康を低めることが指摘されてきた抑制と、ストレスコーピングとしては有効性が指摘されている視点転換の試みとを弁別している。そして、それほど親密でなく目上の相手に対して怒りを感じた体験と、親密で対等な相手に対して怒りを感じた体験について回想してもらった上で、これらの方略の使用傾向と、その後の関係性評価、方略使用に関する自己評価との関連を検討している。その結果、それほど親密でなく目上の相手の場合には、視点転換の試みのみが関係性評価と正の関連を示し、親密で対等な相手の場合には、建設的表出のみが関係性評価と正の関連を示した。また、2つの関係性条件の間で怒り感情制御方略の使用傾向の違いを検討したところ、視点転換の試みについては関係性による違いは見られなかったが、一方的表出と建設的表出については、親密で対等な相手の場合の方がそれほど親密でなく目上の相手に対する場合よりも多く行っており、抑制に関してはその逆の結果であった。関係性に応じた怒り感情制御方略の規範意識がその使用傾向に影響を及ぼすと考えるならば、一方的表出、建設的表出、そして抑制に関する規範は親密性と地位という関係性要因の影響を受けると予想される。

方法

調査対象者と手続き

調査は愛知県内の3つの大学において、大学生335人(男性127人、女性207人、不明1人)を対象に、授業時間内を利用して行われた。平均年齢は

19.31 歳($SD = 1.56$)であった。

怒り喚起場面の作成 本研究の調査対象者とは異なる大学生に対して、別の調査の中で過去に怒りを感じた体験についての自由記述を求めた。収集された怒り体験エピソードを、Fehr, Baldwin, Collins, Patterson, & Benditt(1999)の分類に基づき、信頼の裏切り、拒絶、不当な批判、怠慢・配慮のなさ、慢性的ないらつきの 5 通りに分類し、バイトやサークル場面など、多くの大学生が経験すると考えられる場面を用いることにした。先述のように地位が同等の相手と地位格差のある相手との間で同じエピソードを用いることが現実性の観点から困難であったため、地位が上の相手との間でのエピソードと地位の対等な相手との間でのエピソードについてそれぞれ 5 通り用意した。そしてそれぞれの場面について、相手が親密な場合とそれほど親しくない場合の 2 つの条件を設定し、調査参加者には地位条件(目上、対等)×親密条件(親密、非親密)の 4 パターンのうち、いずれかを提示した。使用した各場面を付録に示す。

質問紙の構成

上記の各場面と相手との関係性に関する情報を提示した後、以下の各項目への回答を求めた。調査参加者のうち、2 つの大学での参加者 131 人は、いずれかの関係性条件に関するエピソード 5 場面について評定を求めた。残りの 1 つの大学での参加者 204 人は、調査実施時間の制約から、いずれか 1 場面についてのみ評定を求めた。そこで分析に関しては、各場面での評定には一律に関連のないものとみなし、サンプル数は $n = 859$ となる。評定はすべて「全くそう思わない」から「とてもそう思う」までの 7 件法を用いた。

1. **怒り感情制御に関する規範** 吉田・高井(2007)で作成された怒り感情制御方略尺度の中で、一方的表出、建設的表出、抑制、視点転換の試みを構成する各 1 項目を使用し、それぞれの場面でどのようにふるまうのが適切だと思うかを尋ねた。具体的には、一方的表出は「相手に感情的に怒りをぶつける」、建設的表出は「相手の気持ちを思いやりながら、自分が怒っていることを伝える」、抑制は「自分のイライラした気持ちを隠そうとする」、そして視点転換の試みは「今の状況をポジティブにとらえようとする」との表現を用いた。

2. **怒り感情制御方略の使用傾向** 上記と同様の項目を用いて、シナリオに書かれている出来事を実際に体験した場合に、調査参加者自身だったらどのようにふるまうと思うかについて尋ねた。

結果

各場面における、関係性条件ごとの各変数の平均

値と標準偏差を Table 1 に示す。4 つの怒り感情制御方略の使用に関する規範に対して、関係性の影響を検討するため、地位と親密性そして場面を説明変数とした三要因分散分析を、怒り感情制御に関する 4 つの方略に関する規範得点それぞれを目的変数として行った。ただし場面間の異動に関しては本研究での焦点としていないため、以後は地位と親密性の効果に関して報告する。分析の結果、地位は一方的表出、建設的表出、抑制、視点転換の試みのいずれに対しても有意な F 値を示した(それぞれ $F(1, 839) = 46.77, 20.54, 39.61, 6.78$, いずれも $p < .01$)。親密性については、いずれの規範得点に対しても有意な F 値は得られず、交互作用も有意ではなかった。

次に怒り感情制御方略の使用傾向に関して、上記と同様の分析を行った。その結果、視点転換の試みを除く 3 つの制御方略に対して、地位が有意な F 値を示した(一方的表出で $F(1, 839) = 38.59$, 建設的表出で $F(1, 839) = 25.25$, 抑制で $F(1, 839) = 10.84$, いずれも $p < .01$)。親密性については、抑制の使用傾向のみで有意な F 値が得られた($F(1, 839) = 6.68, p < .01$)。交互作用はいずれの規範得点についても有意ではなかった。

また、怒り感情制御方略の使用傾向の違いに及ぼす関係性の影響が、関係性に応じた規範意識の違いに媒介される程度を検証するため、地位を説明変数に、怒り感情制御方略を目的変数とした上で、怒り感情制御に関する規範を共変量とした共分散分析を、上記の怒り感情制御方略の使用傾向を目的変数とした多変量分散分析で有意な F 値が見られなかった視点転換の試みを除く 3 つの怒り感情制御方略ごとに行った。その結果、一方的表出と建設的表出については、地位の効果が有意であった(それぞれ $F(1, 855) = 6.72, 8.92$, いずれも $p < .01$)。それぞれの怒り感情制御方略に関する規範と使用傾向との関連については、いずれの方略も、規範と使用傾向の間には中程度の相関が見られた(一方的表出で $r = .61$, 建設的表出で $r = .58$, 抑制で $r = .54$, 視点転換の試みで $r = .68$, いずれも $p < .01$)。

考察

本研究の目的は、怒りが生起する対人場面において、相手との関係性の違いに応じて、どのような怒りの制御方略をとるべきかという規範が異なるかどうか、そして関係性に応じた怒り感情制御方略の使用傾向の違いは、こうした規範意識の影響を受けるかどうかを検証することであった。関係性要因としては、これまでの知見を踏まえて親密性と地位という 2 つの要因を取

Table 1 各場面における怒り感情制御方略に関する規範と使用傾向についての記述統計(平均値と標準偏差)

		目上条件(場面 1-5)					対等条件(場面 6-10)				
		場面 1	場面 2	場面 3	場面 4	場面 5	場面 6	場面 7	場面 8	場面 9	場面 10
一方的表出規範	非親密	2.64 (1.35)	2.33 (1.03)	2.58 (1.53)	2.81 (1.47)	2.76 (1.23)	3.29 (1.67)	3.87 (1.70)	3.32 (1.60)	3.43 (1.82)	2.71 (1.29)
	親密	2.67 (1.48)	2.34 (1.31)	2.65 (1.52)	2.66 (1.41)	2.87 (1.41)	3.00 (1.32)	4.12 (1.77)	3.68 (1.64)	3.40 (1.68)	2.41 (1.19)
建設的表出規範	非親密	4.64 (1.45)	3.98 (1.44)	3.90 (1.40)	4.47 (1.33)	4.64 (1.35)	5.00 (1.28)	5.13 (1.45)	4.97 (1.40)	5.27 (1.28)	4.42 (1.50)
	親密	5.02 (1.42)	4.40 (1.65)	4.43 (1.53)	4.73 (1.34)	4.55 (1.50)	4.95 (1.24)	5.29 (1.35)	4.63 (1.50)	5.12 (1.28)	4.43 (1.72)
抑制規範	非親密	3.89 (1.35)	4.70 (1.15)	4.73 (1.48)	4.30 (1.35)	4.44 (1.42)	3.66 (1.39)	3.03 (1.37)	3.74 (1.13)	3.73 (1.56)	4.21 (1.30)
	親密	3.38 (1.33)	4.30 (1.47)	4.24 (1.48)	3.93 (1.42)	4.28 (1.41)	4.00 (1.23)	3.19 (1.37)	3.48 (1.15)	3.56 (1.20)	4.23 (1.29)
視点転換の試み規範	非親密	4.59 (1.52)	4.37 (1.57)	4.06 (1.41)	4.19 (1.36)	4.04 (1.54)	4.37 (1.52)	3.77 (1.74)	4.13 (1.58)	3.73 (1.64)	4.21 (1.49)
	親密	4.31 (1.68)	4.85 (1.41)	3.93 (1.53)	4.07 (1.63)	3.85 (1.57)	4.05 (1.50)	3.24 (1.65)	3.90 (1.69)	3.79 (1.66)	4.30 (1.61)
一方的表出	非親密	2.98 (1.46)	2.54 (1.30)	2.77 (1.77)	2.87 (1.48)	3.07 (1.36)	3.20 (1.71)	4.15 (1.69)	3.58 (1.54)	3.00 (1.70)	3.13 (1.46)
	親密	2.58 (1.51)	2.47 (1.37)	2.83 (1.69)	2.86 (1.59)	2.85 (1.66)	3.02 (1.42)	4.38 (1.51)	3.95 (1.66)	3.37 (1.69)	2.61 (1.30)
建設的表出	非親密	4.07 (1.62)	3.98 (1.36)	3.23 (1.52)	4.13 (1.56)	4.29 (1.56)	4.63 (1.17)	4.59 (1.57)	4.79 (1.53)	4.68 (1.49)	4.45 (1.55)
	親密	4.15 (1.64)	4.06 (1.51)	3.65 (1.85)	3.89 (1.60)	4.06 (1.58)	4.37 (1.43)	4.52 (1.57)	4.28 (1.57)	4.37 (1.63)	4.18 (1.60)
抑制	非親密	3.95 (1.78)	4.72 (1.38)	4.42 (2.00)	4.11 (1.78)	3.87 (1.59)	4.00 (1.70)	3.21 (1.42)	3.66 (1.62)	4.05 (1.76)	4.74 (1.48)
	親密	4.52 (1.64)	4.79 (1.61)	4.57 (1.70)	4.48 (1.77)	4.60 (1.69)	4.46 (1.54)	3.69 (1.68)	3.33 (1.54)	4.21 (1.58)	4.98 (1.21)
視点転換の試み	非親密	3.80 (1.61)	3.67 (1.48)	3.27 (1.66)	3.34 (1.67)	3.24 (1.45)	3.65 (1.57)	3.15 (1.80)	3.55 (1.66)	3.14 (1.69)	3.53 (1.64)
	親密	3.88 (1.72)	3.87 (1.57)	3.15 (1.74)	3.75 (1.83)	3.23 (1.45)	3.34 (1.65)	2.81 (1.64)	3.80 (1.91)	3.28 (1.82)	3.93 (1.72)
N	非親密	44	46	48	47	45	35	39	38	37	38
	親密	48	47	46	44	47	41	42	40	43	44

註 1: カッコ内は標準偏差を表す。

註 2: 各場面の内容は以下の通り。場面 1: 相手の裏切り; 場面 2: 拒絶; 場面 3: 不当な批判; 場面 4: 怠慢、配慮のなさ; 場面 5: 慢性的ないらつき; 場面 6: 相手の裏切り; 場面 7: 拒絶; 場面 8: 不当な批判; 場面 9: 怠慢、配慮のなさ; 場面 10: 慢性的ないらつき

り上げ、怒り感情制御方略に関する規範意識と使用傾向のそれぞれについて、関係性の影響を検討した。以後、規範意識と使用傾向の結果を照らし合わせながら、それぞれの制御方略について考察していく。

まず一方的表出の使用傾向については、地位のみの効果が見られ、対等な相手よりも目上の相手に対して、より一方的表出を行うのは控えるだろうと認識されているという結果であった。吉田・高井(印刷中)では親密対等条件よりも非親密目上条件の方が一方的表出を行うのを控えているという結果が見られたが、この違いには地位の要因が影響を与えていたと推察される。そして同様の傾向は規範意識に関しても見られた。すなわち、対等な相手と比べると目上の相手には一方的表出を行うべきでないという結果が得られた。目上の相手には怒りのような不快な感情は表すべきではないといった規範があり、それが実際の表出傾向に反映されていたと解釈することができよう。

建設的表出の使用傾向に関しても、一方的表出と同様に地位の効果が見られ、目上の相手よりも対等な相手に対して、建設的表出を行うだろうとの認識が強かった。規範意識についても同様で、目上の相手の場合と比べ、対等な相手には建設的表出を行うべきであるという意識が強かった。木野(2004)も述べているように、目上の相手に対して諭すような調子で説得を試みることは、一方的表出と同じように好ましいことではないと認識されていると考えられる。これまでの怒りの表出研究では表出を一方的な表出と建設的な表出に弁別したものは少なく、Deffenbacher, Oetting, Lynch, & Morris(1996)や木野(2000, 2004)など、ごく少数である。それぞれの表出がもたらす对人的効果から考えても一方的な表出と建設的な表出とは弁別して捉える必要があると考えられるが、本研究が示したように相手との地位の違いによってその規範は異なるわけであるから、表出方法の弁別のみならず、相手との地位の違いという関係性要因にも注意しておく必要がある。

抑制に関しては、その使用傾向は地位と親密性のどちらの影響も受けることが示された。すなわち、対等な相手よりも目上の相手に対してはより怒りの感情表出を抑制し、親密でない相手よりも親密な相手に対してより抑制を行うという傾向が見られた。しかし規範意識に関しては地位の影響のみが見られ、目上の相手に対しては、対等な相手よりも怒り感情の表出を抑制すべきであると認識されていた。規範としては親密性による違いは見られないのに、使用傾向に対しては親密性の影響が得られたことは、規範以外の要因が

関係性に応じた怒り感情制御方略の使用に影響を与えていることを示唆している。たとえば、親しい相手に対して怒りを表出してしまったら相手との関係が悪化するのではないかとといった結果予期に関する不安が背景にあるためかもしれない。

視点転換の試みの使用傾向については、吉田・高井(印刷中)と同様、関係性による違いは見られなかった一方で、規範意識に関しては地位の影響が見られ、対等な相手よりも目上の相手に対して視点転換の試みを行うべきであると認識されていた。視点転換の試みという方略は、相手に怒りを表出することなく、精神的健康との間では正の関連が示されている出来事の再評価を行おうとする試みである。表出に関する規範の結果と合わせて解釈すると、目上の相手に対しては一方的表出であれ建設的表出であれ、怒りの表出は望ましくなく、表出をせずに認知的に折り合いをつけるべきという規範意識が見られるということである。しかし怒りの建設的表出を行えない分、対等な相手よりも怒り感情を低減させる方略に限られてしまうために、目上の相手に対して怒りを感じた出来事を再評価するのは困難が伴うものと考えられる。したがって使用傾向で見た場合には、目上の相手と対等な相手とで程度に差が見られなかったものと推察される。

総じて見ると、怒り感情の制御に関する規範意識については、地位のみが影響を及ぼしているという結果であったと言えよう。他方で怒り感情制御方略の使用傾向については、地位と親密性の影響は、制御方略の内容によって異なるという結果であった。木野(2000)では本研究とは異なる怒り感情制御方略の枠組みを用いているが、理性的説得は本研究で用いた建設的表出に類似した制御方略であり、理性的説得は先輩に対するよりも同輩に対する方が使用頻度が高いという結果は、本研究で得られた知見と対応している。またいつもどおりという方略は、本研究での抑制に対応する方略と考えられるが、いつもどおりという方略は同輩よりも先輩に対して行われているという結果も、本研究の結果と対応している。こうした地位に応じた怒り感情制御方略の使用傾向の違いについて別の方法により検証したこと、親密性という要因を含めて関係性という要因を扱ったこと、そして方略使用の規定因として規範意識の影響を検討したことが、本研究による独自の知見と言えよう。ただしすべての方略について過去の知見と対応した結果が得られたわけではない。木野(2000)が用いた感情的攻撃という方略は本研究での一方的表出に類似した制御方略であるが、感情的攻撃については先輩と同輩との間で使用頻度に差は見られていない。木野(2000)では相手が

時間に遅れる、努力した成果を否定される、相手が協同作業に協力しない、過度に干渉されるという部活内での4つのエピソードを用いているが、こうした場面特異性が、本研究での結果との違いを生じさせた可能性が考えられる。本研究で用いた場面の間でも怒り制御方略の規範意識や使用傾向に関しては一定の散らばりが見られることから、後述するように状況の性質を規定している要因に留意する必要がある。

また、規範意識が関係性から制御方略使用への影響を媒介する可能性を検討したところ、規範の効果を統制してもなお、地位は一方的表出と建設的表出に影響を与えていた。抑制の使用傾向については地位に応じた規範によって媒介されることが示されたが、一方的表出と建設的表出に関しては、地位以外の要因が、地位の違いによって異なる制御方略の使用傾向に影響を与えていることを、この結果は示唆している。したがって、相手との関係性によって使用される怒り感情制御方略が異なる背景について明らかにするためには、規範以外の規定因をも検討すべきである。

最後に本研究の限界と今後の展望について述べる。本研究では場面想定法を用いて、どのような怒りの制御方略を用いるべきかという規範認知と、実際にどのような方略を用いるかという使用傾向の認知を扱ったわけだが、Berkowitz(1989)やCrick & Dodge(1994)、Anderson & Bushman(2002)など多くの情報処理モデルが示しているように、特定の制御方略を決定するまでの認知的プロセスにおいては、規範意識の他にもさまざまな要因が影響を与えていると考えられる。たとえばその状況で喚起された怒りの程度(Spielberger, 1999)や原因帰属(Allred, Mallozzi, Matsui, & Raia, 1997; 大淵, 1986)、動機側面(大淵, 1986)などは、怒りの表出に影響を与えることが実証されている。今回とりあげた場面の中で規範意識や使用傾向に差異が見られた背景に、こうした要因の影響が考えられる。これら諸要因の影響も踏まえて、実際に関係性に応じた規範の認知がオンラインでどのように処理されているのかについて、実験的手法など他の方法から検討することが今後求められるであろう。

引用文献

- Allred, K. G., Mallozzi, J. S., Matsui, F., & Raia, C. P. (1997). The influence of anger and compassion on negotiation performance. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 70, 175-187.
- Anderson, C. A., & Bushman, B. J. (2002). Human Aggression. *Annual Review of Psychology*, 53, 27-51.
- Bagby, R. M., Taylor, G., & Parker, J. D. A. (1994). The twenty-item Toronto Alexithymia Scale-II, convergent, discriminant, and concurrent validity. *Journal of Psychosomatic Research*, 38, 33-40.
- Barrett, L. F., Robin, L., Pietromonaco, P. R., Eyssell, K. M. (1998). Are women the "more emotional" sex?: Evidence from emotional experiences in social context. *Cognition and Emotion*, 12, 555-578.
- Berkowitz, L. (1989). The frustration-aggression hypothesis: An examination and reformulation. *Psychological Bulletin*, 106, 59-73.
- Bleiker, E. M. A., Van der Ploeg, H. M., & Hendriks, J. H. C. L. (1993). Rationality, emotional expression and control: Psychometric characteristics of a questionnaire for research in psycho-oncology. *Journal of Psychosomatic Research*, 37, 861-872.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, 115, 74-101.
- Deffenbacher, J. L., Oetting, E. R., Lynch, R. S., & Morris, C. D. (1996). The expression of anger and its consequences. *Behaviour Research and Therapy*, 34, 575-590.
- Fehr, B., Baldwin, M., Collins, L., Patterson, S., & Benditt, R. (1999). Anger in close relationships: An interpersonal script analysis. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25, 299-312.
- Gratz, K. L., & Roemer, L. (2004). Multidimensional assessment of emotion regulation and dysregulation: Development, factor structure, and initial validation of the difficulties in emotion regulation scale. *Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment*, 26, 41-54.
- 伊藤 拓・上里一郎 (2001). ネガティブな反すう尺度の作成およびうつ状態との関連性の検討 *カウンセリング研究*, 34, 31-42.
- Joseph, S., Williams, R., Irwing, P., & Cammock, T. (1994). The preliminary development of a measure to assess attitudes towards emotional expression. *Personality and Individual Differences*, 16, 869-875.
- King, L. A., & Emmons, R. A. (1990). Conflict over emotional expression: Psychological and physical correlates. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 864-877.
- 木野和代 (2000). 日本人の怒りの表出方法とその対人

- 的影響 心理学研究, 70, 494-502.
- 木野和代 (2004). 対人場面における怒りの表出方法の適切性・効果性認知とその実行との関連 感情心理学研究, 10, 43-55.
- Lively, K. J., & Powell, B. (2006). Emotional expression at work and at home: Domain, status, or individual characteristics? *Social Psychology Quarterly*, 69, 17-38.
- Martin, R. C., & Dahlen, E. R. (2005). Cognitive emotion regulation in the prediction of depression, anxiety, stress, and anger. *Personality and Individual Differences*, 39, 1249-1260.
- Martin, R., Wan, C. K., David, J. P., Wegner, E. L., Olson, B. D., & Watson, D. (1999). Style of anger expression: Relation to expressivity, personality, and health. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25, 1196-1207.
- Mayer, J. D., & Stevens, A. A. (1994). An emerging understanding of the reflective (meta-) experience of mood. *Journal of Research in Personality*, 28, 351-373.
- 大淵憲一 (1986). 質問紙による怒りの反応の研究 — 攻撃反応の要因分析を中心に — 実験社会心理学研究, 65, 127-136.
- 大淵憲一・小倉左知男 (1984). 怒りの経験(1) — Averill の質問紙による成人と大学生の調査概況犯罪 — 心理学研究, 22, 15-35.
- 大淵憲一・小倉左知男 (1985). 怒りの動機 — その構造と要因及び反応との関係 — 心理学研究, 56, 200-207.
- Roger, D., & Najarian, B. (1989). The construction and validation of a new scale for measuring emotion control. *Personality and Individual Differences*, 10, 845-853.
- 坂上裕子・菅沼真樹 (2001). 愛着と情動制御 — 対人様式としての愛着と個別情動に対する意識的態度との関連 — 教育心理学研究, 49, 156-166.
- Sperberg, E. D., & Stabb, S. D. (1998). Depression in women as related to anger and mutuality in relationships. *Psychology of Women Quarterly*, 22, 223-238.
- Spielberger, C. D. (1999). *STAXI-2: State-Trait Anger Expression Inventory-2: Professional manual*. Odessa, Fla: Psychological Assessment Resources.
- Sukhodolsky, D. G., Golub, A., & Cromwell, E. N. (2001). Development and validation of the anger rumination scale. *Personality and Individual Differences*, 31, 689-700.
- Swinkels, A., & Giuliano, T. A. (1995). The measurement and conceptualization of mood awareness: Monitoring and labeling one's mood states. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 21, 934-949.
- Watson, M., & Greer, S. (1983). Development of a questionnaire measure of emotional control. *Journal of Psychosomatic Research*, 27, 299-305.
- 吉田琢哉・高井次郎 (印刷中). 怒り感情の制御に関する調整要因の検討 — 感情生起対象との関係性に着目して — 感情心理学研究

The effect of the norm related to anger regulation according to interpersonal relationships

Takuya YOSHIDA (*Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University*)
Jiro TAKAI (*Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University*)

Effects of emotion regulation tactics which represent expression or non-expression have been examined in relation to psychological well-being. However, which tactic is effective would be contingent on the interpersonal relationships with the agent of arousal at least for anger regulation, as the norms pertaining to emotion expression may differ with intimacy or social status of the target. As it was vague that whether both intimacy and status influenced the cognition of norm and use of each tactic, the present research, focusing on anger, examined the influence of intimacy and status on norm and use of anger regulation tactics. A vignette approach revealed that social status generally had some effect on the norm of anger regulation. Results also showed that the social status had positive relationships with the anger regulation tactics after the effects of the norm had been statistically controlled. Further examination of relationship factors and on-line information processing of anger regulation was discussed.

Key words: anger, emotion regulation, interpersonal relationship, norm.

付録 本研究で使用したシナリオ

場面 1(目上条件・相手の裏切り)

あなたはバイト先で、Aさんと来月のシフトの相談をしています。あなたは、来月は特に決まった予定はなかったので、「何曜日でもいいので、週に3日ずつ入れてください」と言いました。しかし、後日決まったシフトを見ると、あなたは、毎週4日ずつ入れられています。Aさんにこのことをたずねてみると、「何曜日でもいいと言っていたので、来月くらい週4日でも大丈夫でしょ」と言われました。あなたはAさんのことを信じてシフトをまかせたのに、Aさんは、あなたには何の相談もなしに、勝手にシフトを増やしてしまったのです。

場面 2(目上条件・拒絶)

あなたはここ1年ほど、あるバイトをしています。そろそろ何か別のバイトを始めたいと思いはじめたあなたは、今のバイトをやめようと思っています。ある日、Bさんに「あとひと月働いたらこのバイトをやめたいのですが」と話を切り出しました。しかしBさんは、「これから忙しい時期に入るのに、いったい何を言っているんだ。あと2か月は働いてもらわないと困るよ」と、一方的に話を切り上げてしまいました。あなたの希望は、一方的に拒絶されてしまったのです。

場面 3(目上条件・不当な批判)

Cさんは、気分がムラのある人で、ときどきささいなことをきっかけに、とても機嫌が悪くなったりします。ある日、あなたがバイト先に行ってみると、Cさんはとても機嫌が悪いように見えました。その日、あなたはいつものようにまじめに仕事をしていたのですが、仕事が終わるとCさんがあなたのところに来て、「君は仕事が遅いね。もう長いことやっているんだから、もっとしっかりしてもらわないと困るよ」と怒られてしまいました。Cさんは、あなたに八つ当たりをしてきたのです。

場面 4(目上条件・怠慢、配慮のなさ)

あなたの所属するサークルで、次の年度に向けて、メンバーの名簿を作ることになりました。話し合いの結果、あなたとDさんとで名簿作りを引き受けることになりました。そこでDさんといろいろ仕事の分担を決めていったのですが、Dさんは面倒がってあまり仕事を引き受けてくれません。名簿を作るためには、メンバー全員のメールアドレスを調べなければならぬのですが、Dさんは「その仕事は面倒だな。君にまかせたよ」といって引き受けてくれませんでした。Dさんは、面倒だという理由で仕事のほとんどをあなたに押しつけてきたのです。

場面 5(目上条件・慢性的ないらつき)

あなたはここ1年ほど、あるお店でバイトをしています。Eさんはそのお店の店長なのですが、あまり頼りにならない人で、よくミスをするし、接客態度もあまり良くないので、あなたはEさんの仕事ぶりを見ているといらいらすることがあります。ある日、Eさんから頼まれてあなたはある仕事をしていたのですが、Eさんの指示のミスで、もっと先にやっておかなければいけない大事な仕事があったのです。Eさんはあなたに、いそいでその別の仕事にとりかかるように言ってきました。このように、Eさんのミスのせいであなたがとばっちりを受けることは、何度もあったのです。

場面 6(対等条件・相手の裏切り)

あなたは大学で、あるスポーツサークルに所属しています。あなたはAさんとペアを組んで、1週間後の試合に参加する予定です。二人ともこの試合にはとても燃えていて、明日から毎日自主トレーニングをしよう約束しました。しかし次の日、どうしたのかAさんは現れません。そこでAさんに「どうしたの?」とメールを入れてみると、「ごめん、今日は彼氏(彼女)と急な用事ができちゃった」と返事が返ってきました。あなたはAさんもこの試合にかけていると信じていたのに、その信頼を裏切るようなことをされたのです。

場面 7(対等条件・拒絶)

あなたは自分の身体に、あるコンプレックスを持っています。ある日、あなたはサークルの飲み会に参加していました。すると、ちょっと遠くでBさんがあなたの気になっているコンプレックスをネタにして、笑いをとっていました。途中でお手洗いにいくと、ちょうどそこにBさんもやってきたので、Bさんに、自分のコンプレックスのことをネタにするのはやめてくれるよう頼みました。しかしBさんは「場が盛り上がるんだから、いいじゃないか。」と、無神経なことを言ってきました。あなたは、本心からやめてほしいと思っているお願いを、Bさんに断られたのです。

場面 8(対等条件・不当な批判)

あなたは大学であるサークルに所属しています。そのサークルで今度の夏休みに行く合宿の企画を、あなたとCさんの二人がまかされています。あなたはCさんという人と仕事の分担を決めて、宿泊先の宿の手配は、Cさんがしてくれることになりました。ところが合宿の近づいてきたある日、宿のことをCさんに確認してみると、なんと予約する日を一日間違えていました。急いで宿に確認してみると、もう本来の日は満室になっていました。明らかにCさんのミスなのですが、Cさんは「もっと早くに言ってくれば、こんなことにはならなかったのに」と言いました。Cさんは謝るところか、むしろあなたを責めてきたのです。

場面 9(対等条件・怠慢、配慮のなさ)

あなたは大学であるサークルに所属しています。そのサークルで最上学年の先輩たちが引退するというところで、全員で何かプレゼントを用意しようという話になりました。話し合いの結果、あなたとDさんとで、プレゼントを買ってくることになりました。ある週末、二人で待ち合わせをしてプレゼントを買いに行くことにしました。しかしいつまで待ってもDさんはやってきません。随分時間の過ぎた頃にDさんは待ち合わせ場所にやってきました。Dさんはルーズな性格で、事前に何の連絡もせずに、特別な理由もなく、待ち合わせに大幅に遅れてきたのです。

場面 10(対等条件・慢性的ないらつき)

Eさんとあなたは、あるお店で同じバイトを数ヶ月ほど一緒にやっています。Eさんはあまり頼りにならない人で、よくミスをするし、接客態度もあまり良くないので、あなたはEさんの仕事ぶりを見ているといらいらすることがあります。ある日、開店前の準備をしていたEさんとあなたは、分担して一つの仕事をしていました。ところがEさんはその仕事のやり方を間違えてしまっていて、結局開店前にその仕事は終わらなかったのです。そのあと、二人とも店長から怒られてしまいました。このように、Eさんのミスのせいであなたがとばっちりを受けることが、何度もあったのです。